加藤周一氏の「明治初期の翻訳」について

荒川清秀

加藤周一氏を迎えて行なわれた愛知大学国際コミュニケーション学会学術総合研究会の討論の部で筆者は発言する機会があったが，時間の関係もあり，こちらの考えを十分伝えることができなかったので，以下それについて書いてみたい。なお，加藤周一氏の講演は岩波講座『日本近代思想体系　翻訳の思想』所収「明治初期の翻訳－何故，何を，如何に訳したか」をもとにしているので，以下この論文に沿って疑問点を出すことにする。

筆者の加藤氏に対する疑問点は大きく次の2点である。

(1)　その一つは明治維新前後に日本で翻訳が盛んになる前に，日本と中国で西洋諸国の制度や政治，歴史に対して関心がなかったのかどうかという問題

(2)　もう一つは当時の翻訳が漢語で行われたことに対する，のちへの影響，功罪の問題

である。

まず，(1)について。加藤氏は江戸時代，蘭学が興ってはいたが，その内容は「天文暦法，医学，航海術などを主とする技術的な領域にとどまり，西洋諸国の制度や政策やその歴史的背景には及ばなかった」という。また，中国について加藤氏は，「清朝の中国で「訳館を立てて夷書を翻する」組織的な事業が始められたわけではな」いとも言う。はたしてそうだろうか。

たしかに，江戸蘭学はまず医学に起こり，幕末には兵学に傾斜していく。しかし，その間にあって，西洋の地理や歴史，制度に関心がいかなかったわけではない。それは最初，漢訳洋書『職方外紀』の伝来によって引き起こされた。これは17世紀に来華したイエズス会宣教師アレニの書いた地理書で，幕府の禁書にもなった関係で刊本も出ず，おおっぴらに読むこともはばかられたが，西洋の知識に渇望していた人々は本書を争って筆写し，その内容を引

用書を秘したまま自らの著書に書き入れたほどであった。具体的な例については鮎沢信太郎『地理学史の研究』(愛日書院 1948) を参照。そこでは，ヨーロッパでの政治，宗教の関係が述べられ，制度が紹介されている。また「貧院」「幼院」「病院」といった社会的救済の制度まで紹介されている。ちなみに，「病院」ということばは『職方外紀』によって日本にもたらされ，蘭学者たちに使用されることで日本語として定着していったものである。

江戸時代は歴史だけをとりたてて紹介した本はそれほど多くは出ていないが，地理書の中に歴史，それも後になるにつれ動態的歴史に対する関心が芽生えていることは小沢栄一『近代日本史学史の研究 幕末編』(吉川弘文館 1966) が詳しく述べている。たとえば蘭学者には次のような書がある。

山村才助『西洋雑誌』『訂正増訳采覧異言』
佐藤信淵『西洋列国史略』
渡辺崋山『西洋事情書』『外国事情書』
箕作省吾『坤輿図識』『坤輿図識補』
箕作阮甫『八紘通志』

また，翻訳書としては，

小関三英『新撰地誌』
渡辺崋山『新釈輿地図説』
杉田玄端『地学正宗』

等がある。これらはオランダのプリンセンの地理書を翻訳したものである。

また，

青地林宗『輿地志』

はオランダの地理書いわゆるゼオグラフィーを翻訳したものである。

また，翻訳をするまでもなく，当時の知識人は中国伝来の漢訳洋書をそのまま読むことができたし，訓点さえほどこせば，より多くの人々が理解することができた。その中で特記すべきは，

『海国図志』(60巻本 1847)
『瀛環志略』(1848)
『地理全志』(1853–54)
『地球説略』(1856)
『大美聯邦志略』(1861)

のような地理書が，中国で刊行まもなく日本に伝わり，これらすべてに和刻本あるいは翻訳書がつくられたということである。万延元年 (1860) の遣米使節団の日記には『地球説略』『地理全志』等の書名が出てくる。幕末の日本人はこうした書によって海外知識を得ていたのである。

また海外事情を紹介した雑誌・新聞の類としては，

『六合叢談』

『中外新聞』

が入り翻刻された。これらの中でも外国事情が語られ，政治や制度が紹介されている。こうした，日本にもたらされ，翻刻された書について詳しくは明治百年記念文化事業会編『鎖国時代日本人の国際知識』(乾元社　1953)，小沢三郎『幕末明治耶蘇教史研究』(新版　日本基督教出版局　1973) を参照。

加藤氏は中国については，魏源の『海国図志』を取り上げているにもかかわらず，「清朝の中国で「訳館を立てて夷書を翻する」組織的な事業が始められたわけではな」いという。はたしてそうだろうか。

たしかに，魏源がアヘン戦争後に林則徐の収集した資料を引き継ぎ，『海国図志』50巻を完成した1842 (or 44) 年の段階では，魏源たちはたしかに少数派であった。しかし，魏源自身生前に『海国図志』を，

1847年　60巻本

1852年　100巻本

と二度も改訂増補して出しているし，かれの死後も，

1876年　100巻本

1895年　125巻本

と訂正増補がなされている。これはすなわち，『海国図志』が当時としては有用な書であったからである。

また，徐継畬は1848年に『瀛環志略』を出し，世界地理，世界情勢について論じただけでなく，その中でナポレオン，ロシアのピョートル大帝，アメリカのワシントンらの事績を詳しく紹介し，ワシントンに対する賛美は保守派の批判を買ったほどであった (『徐継畬与東西方文化交流』中国社会科学出版社　1993)。徐継畬はのちに北京同文館の総教習になり，『瀛環志略』も以後何度も版を重ねている (荒川『近代日中学術用語の形成と伝播』白帝社　1977 p. 276)。

アヘン戦争後清朝政府も外交文書をあつかう上で外国語学習の必要を感じ，1862年北京に英仏語の講習所をもつ京師同文館を設け，翌年には上海に，そしてさらにその翌年には広東にも同文館を設けた。また，1868年には，先にできていた江南製造総局の中に翻訳局をつくり，西洋人顧問フライデーをイギリスから招き，西洋書の組織的な翻訳を始めた。江南製造局翻訳局については橋本南都子「清朝江南製造局翻訳館の設立とその歴史的役割」(『東海大学紀要外国語教育センター』第12輯　1991)，熊月之『西学東漸与晩清社会』(上海人民出版社　1994)，王揚宗「江南製造局翻訳書目新考」(『中国科技史料』16–2 1995)，といった研究が出ている。もちろん，そこでの翻訳書は富国強兵ー軍事，殖産興業の路線に沿ったもので

あるが，同時にそのようなものをもたらした西洋の制度についての関心も高まっていく。清朝の中国でも「訳館を立てて夷書を翻する」組織的な事業は始められていたのである。

たしかに，江戸時代，日本では蘭学が起こり，蘭学者が自ら苦心してオランダ語からの翻訳を行った。こうした翻訳には長崎のオランダ人あるいは長崎通詞の力が大きかったが，オランダ人は長崎では出島に閉じこめられていたし，江戸の人々とは，オランダ商館長の江戸参府の際に，制約された条件のもとで会うことができたにすぎない。ドーフのように，オランダがイギリスに占領された時期を利用し，通詞たちを組織して辞書（ドーフハルマ）を編んだものもいたが，オランダ人が自ら西洋書の日本語翻訳を手がけたわけではなかった。翻訳はあくまで日本人の手にまかされたのである。

それに対し清朝末期の中国では，中国人自身が外国語を学ぶことを禁じられており，外国人も死を決して中国人につき中国語を学んだのである。アヘン戦争，アロー号事件を経て19世紀中葉に清朝政府が組織的に翻訳活動を開始する前は，むしろキリスト教布教を目指す西洋人が自らが中国語を学び，中国人協力者を得てキリスト教布教のための宗教書を始め，上にあげたような多くの地理・科学の書の翻訳を行った。覚醒した中国人，康有為，梁啓超らはこうした西洋人の翻訳した書を読み，西洋事情を学んだのである。

つぎに二番目の問題，明治維新前後につくられた訳語（漢語）の功罪について考えてみたい。加藤氏は「幕末から明治初期にかけて西洋語の文章を，日本語に移すことができたのは，何よりも，日本語の語彙のなかに豊富な漢語が含まれていた」からだという。幕末明治初期多くの訳語が漢語でつくられた理由について国語学者の宮島達夫は「近代日本語における漢語の位置」（『教育国語』16，1969）の中で早くつぎのように指摘していた。

> もし，漢文や漢文直訳体の文章が江戸時代の学問の支配的な文章でなかったら，江戸から明治にかけての訳語のすがた，したがって現代語における漢語の位置は，かなりちがったものになっていただろう。

ただし，訳語が漢語でつくられたのは「日本語の語彙のなかに豊富な漢語が含まれていた」というのは正確ではない。「ふるい漢文の中にすでに用例のあるものと新たにつくったものとがあった」し，その初期においては，いわゆる漢訳洋書の訳語の影響も大きかった。しかも，森岡健二『近代語の成立－明治期語彙編』（明治書院　1969），p. 270で指摘しているように，当時の翻訳で従来の日本語にあった漢語を使った訳語は，

people　citizen　町人　public business　御用（ヘボン『和英語林集成』）

drama　浄瑠璃の類（『英和対訳袖珍辞書』）

のように，あまりにも江戸臭があり，とても新しい概念をもりこむことはできなかった。そうなると，加藤氏引く森田思軒がいうように，日常の語に適当なものがないときは「多く漢語に依頼したり」，箕作麟祥のように中国訳の西洋書の訳語を借りてこなければならなくな

る。加藤氏は「帰化している中国のことばというのは，日本で常用の漢語であろう」というが，これは正しくない。中国訳というのは，在華西洋人とその協力者による翻訳の成果で，これらはたしかに明治初期に英和辞典や翻訳書の訳語として利用されたが，それらは最初から日本で常用であった漢語ではない。むしろ，一般には見なれない漢語であった。

中国の英華辞書あるいは中国での漢訳洋書にない漢語は，いきおい日本人が漢字の組み合わせによって新しい漢語をつくったのだが，それもまた当時の日本人には見なれないものであった。もっとも，見なれないものであるがために，新しい概念を盛りこむことに成功したともいえる。柳父章はこれを「カセット（宝石箱）効果」と呼んだ。もともと意味のないことば（からっぽの宝石箱）が，カセット自体の魅力によって人を引きつけ，いつしか豊かな意味（内容）をもつようになるというものである（『翻訳とはなにか――日本語と翻訳文化』法政大学出版局　1976)。しかし，日常語から乖離した漢語を多く生みだしたことは，現在につながる漢語・漢字問題の元凶ともなったし，多くの分野で学術用語が日常語から遠く離れることになったのである。

日本の社会科学用語が日常語と乖離することを近代日本語による思想的創造性の限界と結びつけていたのは内田義彦で（内田義彦『読書と社会科学』『作品としての社会科学』等)，加藤氏はこの内田の論に深い共感をよせている。加藤氏の例でいえば，ドイツ語のダス・ザイン（Das Sein）は日常語の sein（ある，いる，～である）とつながっているのに対し，日本語の「存在」は日常語，生活感情，文化の基底と，断絶しているというようにとか，内田の例をあげれば「アンガジェ」というフランス語が「愛を誓う」から「政治に参加する」にまでひろがって使われるというふうにである（『作品としての社会科学』p. 28)。

ただし，これはドイツ語やラテン語を母とするロマンス系諸語についていえるだけで，英語では日常語はアングロサクソン系のことばでつくられているのに対し，学術用語はギリシア語やラテン語でつくられ，そのため学術用語は一派の人々には手に届きにくいものになってしまっている。

鈴木孝夫は，日本の学術用語は音だけ聞けば，英語の学術用語のように理解しがたいものが少なくないが，日本語の漢字に「音」と「訓」の働きがあるため，文字を示すと途端に理解しやすくなることを多くの例をあげて論じ，日本の漢字の働きを積極的に評価しようとする（『日本語と外国語』岩波書店　1990　第4章)。たしかに，

水頭症	Wasserkopf	hydrocephalus	suitosyo
無影灯	Shattenfreie Lampe	scialytic lamp	mueito

のような語は「訓」に分解することで意味の手がかりを得られるが，「存在」「概念」「抽象」「具体」「権利」「義務」「会社」「世紀」等，明治初期につくられた哲学，社会科学用語は漢字の訓で読んでも理解の足しにならないものが多い。

要するに内田と鈴木は，学術用語の異なる位相について論じているのあって，それらをと

もに擁するのが近代日本漢語の特徴と言うべきではないだろうか。